①

0004782000

0004782-000

特２４４－７７３

政界財界親分子分

阿部治郎・著

有恒社

昭和１１

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著
第６７条の規定に基づき、平成１２年３
けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

特244
773

政界財界親分子分

阿部治郎著

東京 有恒社發行

昭和二年 帝國圖書館藏本

═目　次═

政界の巻

一、絢へる一本の縄
二、大隈から民政黨へ
三、分裂防止に大童の黨親分
四、官僚畑の伊澤親分
五、自由黨から政友會へ
六、小親分を覗く

財界の巻

一、番町會と卿親分
二、三井を背負つた池田親分
三、小親分鼎立の川崎閥
四、新興親分型藤原
五、次の覇者、森、野口、鮎川

政界・財界親分子分

政界の巻

一、絢へる一本の綱

政界と金蔓——金持と政治家といふ相關は今更云ふまでもない絢へる一本の綱であつて、金蔓のない政治家なんて云ふものが、この世の中で華々しい活動など出來るわけはない。また地道？に百萬圓投資して年何分の利廻りなどやつて行つたのでは、一生涯かゝつたつて金持のカの字の仲間入りも出來ない。今日のことを今日知つてゐたのではもう遲い。明日のこと、明後日のことそして一月、半年、一年の先が見透せてそして投資といふ捨石を打てる金持、しかもこの捨石がきつと幾倍かの現金となつて手許にもどる方式をとらうとすれば、自づとその時代々々を行く政

治的機構と結んで、つまり政商とならなくては本當の金持組にはなれない。

時代の波に乘つてこの兩者の相關を巧みに牛耳る腕があれば一代にして巨萬の富も築かれやうし、またこの兩者を下手に操れば、先刻御承知のやうな昭和聖代の大疑獄と發展する。

實にも政治家と財閥、財閥と政治家は斬つても斬れない生血の通つた二本の腕のやうなもの——この腕二本は正しく現代と云ふ巨大な資本主義を思ひのまゝに推進させる大きな原動力で、この兩者の連がりは良かれ惡しかれ、斷じて見逃せない『時代の足跡』である。それ丈けにこの連がりは極めて緊密であると同時に、紙一重の差で地獄道と極樂道との分岐點ともなり、その個々の關係も時々肉親以上と云はれる鐵則——親分子分の關係でピツタリと結びつけてある。

先づ近世政治家の親分子分を一わたり見渡して財界に轉じやう。

二、大隈から民政黨へ

日本資本主義の高度發達が極めて最近のことであると同じやうに、その母胎となつた政黨も、明治維新後に、伊藤博文公によつて第一歩が出發され、こゝから政黨——そして政治思想——政

治手段を通じて先づ親分子分の連がりは出發した。（以下尊稱を略す）

が、伊藤は何と云つても政黨時代出現の生みの親で謂はゞ政界親分子分の座元の役割を果したことで偉大ではあるが、自ら大親分として振舞はしなかつた。

卽ち伊藤の右手に大隈重信があり、その左手に板垣退助、後藤象二郎がゐた。大隈は人も知る改進黨（今日の民政黨）の元祖であり、明治政界親分として特筆大書されていゝ人物である。

その子分には大隈唯一の智慧者小野梓がゐた。彼は大隈の子分と云ふより寧ろ懷刀であつたら自ら卑下して子分たるに甘んじ、改進黨組織にあたつては（明治十五年一月）實に寢食を忘れる程努力した結果、實踐の士、河野敏鎌、前島密等の同志を傘下に糾合し、その一方早稻田大學の前身である東京專門學校創立に奔走して、その傘下に田島榮、南部英麿、高田早苗、天野爲之等の錚々たる逸材を糾合した。

その結果大隈は、改進黨なる政黨によつて日本政治史の一頁を飾ると同時に、日本國民に西洋文化を注入し自治獨立の眞精神を發揚させるために文敎の府專門學校を率ゐて青年の指導にあたつた。この政黨史上劃期的な傑物の出現は改進黨で進步黨へ、そして憲政會へ、それから國民黨

へ更に同志會へ、それから憲政會――民政黨と變遷史をたどる民政黨の今日まで民政黨内の親分子分を生む發祥點とはなつたのだが、悲しいかな民政黨は財閥三菱をドル箱として極めて順調な經過を辿つた爲か、所屬代議士を飼殺しにして平氣でゐられるやうな大親分は出現しない。加藤高明などはさて措き、若槻禮次郎、濱口雄幸の時代に至つては彼が總裁として君臨したゞけに若干の子分らしい子分が螺集はしてゐたものの、親分若槻、濱口と並べて見るとあまり小粒である

これは時代的な大きな流れが濶達豪放な政治家を要求せずに、むしろ政黨はその行政的技術を官僚から要求し、官僚もまた政治的中樞部門に接近するやうになつてから自づと政治部門への轉出が可能となり、政治は政黨を基礎とすると同時に官僚も亦なくてはならぬ存在となつた。從つて官僚型政治家が次第にその技術的能力を買はれて政黨に轉出し、政黨の持つ民衆性が次第に官僚性に代置された。そこで政黨總裁は野人政黨人を保育する以上に官僚的人材を必要とするに至つたから黨總裁の人物、手腕も次第に官僚化して萎縮し、豪放豪腹、肚の人物は姿を消してしまつた。

ここに登場したのがせい〳〵近ごろでは富田幸次郎位のもの――富田は政界裏面史を語る折に

は第一人者とし登場する。それ程政黨裏面の活躍人でありそのために一度は民政黨から放り出された程の曰く付の人物である。

今は時めく衆議員議長の椅子におさまつてゐるが、この老體仲々この位の椅子に居心地のよいやうな男ではない。折あらば政界の惑星宇垣一成大將を擁立して昭和政界の大頭をすげ代へて、政黨萬能時代を出現させむとする大野心家である。この傘下と云つては些が語弊があらうが富田と通ずる親分子分の連がり陣には例の川崎克を初め新人渡邊鐵藏あたりから鶴見祐輔、中村三之亟、吉川吉兵衛、柳谷寅吉、杉田正一、松田正一、牧山耕藏、片山一男、尾崎重美と云つた面々があり、いざ鎌倉の出陣ともなれば、富田御議長を助けて宇垣擁立の大芝居一幕にも登場すれば政民合同劇、さては政黨淨化運動、選擧肅正運動等々の舞臺にも躍り上つて怪腕を發揮する面々である。

三、分裂防止に大童の黨親分

だが富田親分の怪腕をもつてしても今は時めく日本一の大政黨を牛耳つては行けない。近メシ

居士町田總裁は、持前の算盤勘定から決して利のつかない親分とはならない。あれ程咽喉から手の出る思ひの總裁の椅子でさへ、マア〳〵と尻込みしてやつとの思ひで腰を下すといふ仕末。そんなわけで金蔓と首引きの代議士諸公ともなれば、どうせどつちにころんでも大したさしさはりある筈はなく、今日は東、明日は西河岸へと轉々して總裁直系の子分らしい子分は見當らない。たゞ例の永井柳太郎だけは片腕とは云へ智慧と度胸、舌と自惚は背負切れぬ程持合してゐる。

選擧ともなれば金策もある。平常時となれば政策の案出もする程で、今こそ幹事長としておさまつてゐるが、一旦緩急あれば民政黨なんぞ根こそぎ引つくり返してしまふ度胸がある——とかいはれる。その子分に至つても錚々たる逸物山道襄一、野田文一郎、加藤鋼一、小山谷藏、菊地良一あり。夫に一翼としては町田總裁を通じて永井一門と云へる工藤鐵男あり。木檜三四郎あり、小山倉之助あり、堀内良平あり等々で、永井の親分ぶりは小大隈の稱あるだけに大隈に比して何事もスケールは見劣りするが、仲々民政黨のお坊つちやんあたりに眞似の出來ない腹藝があり、苦勞人らしい強さがある。子分の數を數字で現はしては大變失禮にあたるが、永井親分はその傘下に代議士三十一二名は抱擁出來るし、宇垣のシンパ從つて富田、川崎あたりを中心とした

子分は大凡四十七八名にも及ばうか——。

これに對抗しては黨中立組として白鼠の殿樣で肅軍演說の名士、齊藤隆夫あり、西村丹次郎あり、その他大勢仲々に樂屋裏は賑かであるが、これぞといふ大親分は持合はせない。それだけフリーランサー。よく言へば黨是よりも個人の主張が根本信條、惡く言へば黨に寄生して一旗上げやうとチヤンス狙つてゐる曲者揃ひだと言へる。

先づ表面平穩無事、海面は凪與黨の色を浮べて至極穩かであるが、その底流は四分五裂目下のことろ相敵政友會が分裂行進曲を奏でつゝ沒落の一途を辿つてゐるからこそ、緊褌一番の大相撲をやらうと野心を起す手合も少ないが、これがどうやら黨勢伯仲でヒタ押しに押してゐるとなると事態は極めて險惡である。黨首腦部の苦勞もここにあるつまり大親分にざる黨小親分の惱みがここにあると云ふものである

四、官僚畑の伊澤親分

民政官僚畑の總帥には伊澤多喜男がゐる。彼は自ら政界覆面子を任じ緣の下の力持だと稱して

ゐるが、仲々の古强者、あの苦味走つた顔魂は斷じてたゞの鼠ではない。暗轉行く所を知らない政界にあつて彼こそ獨自の存在だと言へる。彼は所謂官僚畑の元祖で民政系。臺灣總督をやめたばかりの中川建藏なども彼のお聲がかりによつたもの。臺灣拓殖會社に色々と難くせをつけられたり、中川の勇退問題である方面から耳の痛くなる程嫌味を言はれたのも彼伊澤一流の辣腕の結果だ。

その傘下には新官僚の雄、後藤文雄がゐる。彼は新官僚第一人者であるが、伊澤の落し子。國維會なる修養？　結社によつて背つては近衛文麿公、廣田弘毅、荒木貞夫、大塚雅積、岡部長景酒井忠正、二荒芳德、湯澤三千男、唐澤俊樹等一統を糾合して、油斷のならぬ研究をやつたものだ。

ところが時來つて後藤は農林大臣から、內相になる、その上廣田外相は首相になる。荒木陸相は辭して肅軍問題の中心人物となつた等々、時局の流れは渦卷く政爭の中に國維會を持込みさうになつたので、これを解散した。しかし國維會の中心官僚、しかも政黨の沒落と同時に擡頭した官僚の主勢力がこゝに及んだことは間違ひのない事實で、伊澤の怪腕、怪眼はけだし相當のもの

である。近衛公がこの官僚に惚れてゐる。いや公に近接して伊澤あたりが味をやつてゐる等々、——噂はとり〳〵であるが彼を眼中には政界の暗流手にとる如くである。

現在では吉田調査局長官、次田法制局長官、丸山鶴吉、田澤義輔等の錚々たる官僚の名手は何れも伊澤の門下。それから少し下つては唐澤俊樹、相川勝六、賀屋與宜、石渡莊太郎等々の面々があつて、これまた時巡り來らばのチャンスを狙ふ人材揃ひである。

その他新官僚の分野は既に伊澤の傘下から巢立つて、內務、外務、商工省等に相當な人材を擁立して一つの親分子分の線を行く明確な流れは具體化しつつあるが、肅軍と並んで官吏の肅正運動がやかましい折柄、殊に政治的意味を持つ各省ブロックの解剖は後に讓ることゝする。

五、自由黨から政友會へ

『板垣死すとも自由は死せず』三ツ子にも謳はれた彼れの最期の言葉こそ、自由黨生みの親板垣の全生命こめての一言であつた。その決死の傘下三十六士は今にその名を謳はれるが、この刎頸の友こそ實は板垣その人を繞る子分といふにふさはしく、その後明治三十三年伊藤博文が自由

黨の母胎たる憲政黨を中心として立憲政友會を組織し、自ら總裁として君臨するまで彼の眞面目な黨精神として躍如たるものがあつた。

伊藤博文はその子分伊東巳代治、井上毅、金子堅太郎、西園寺公望等を擁して憲政初代の出發點を與へ、政界親分として礎石を置いたが、その精神は、奥田義人、星享原敬等によつて次第に具體化されて行つた。

即ち伊藤の後をうけて東京市政を牛耳つた奥田義人の手腕は相當のもので、府には阿部浩があり、星は先づ麹町から市會議員となつて躍り出て、政友會の都會地への勢力扶殖に大童の活動を開始した。時に明治三十六年。彼は自由黨結成以來、板垣が地方中心に地方ブルジョアを糾合して隱然たる大勢力となした後に大隈の率ゆる改進黨は都會を中心に商工金融ブルジョアを單位として、最大の强敵として現はれた。星は惡く云へば若尾系甲州系財閥の手先となつて市會を利權の府として蹂躙したが、彼の政治家手腕はたしかに大親分としての風格を備へてゐた。伊庭想太郎の兇刄がなかつたなら彼も亦よりその全風貌を政界に押出してゐたらう。

次いで原敬時代に入ると政界潮流は漸次その動向をを移した。つまり政黨の一擧手一投足が凡

てを決した時代が去り、行政機構の完備と相俟つて、行政官の政治的進出が隱然たる勢力を持ち出したからである。そこで原は官僚を手中のものたらしめるために彼獨自の怪腕によつて歴然たる親分時代を創造した。

この時代には原は政友會をまとめて一黨を率ゆることが先決だつたし、行政部門のエキスパートたる官僚をも統率しなければ、大親分政治はやつて行けなかつた。そこで彼は世評に超然としてある時は極めて冒險に富んだ人事も行つたし、本當の子分を獲得するために無理算段の金も消費した。

この意味で彼は政友會親分時代の創始者であり、これに續いた高橋是清、床次竹次郎、犬養毅等といふ手合はこの大親分創始時代の謂はゞ時代的所産である。

近世に至つて順序として先づ政友會總裁の鈴木親分に指を屈しやう。

彼は「腕の親分」あの——今こそ痩せてはゐるが——腕にものを言はせた司法畑の鈴木でありまた平沼を怖がらせた鈴木法學博士である。そも〳〵政友會總裁を獲得した時代にやつた無理が今にたゝつて、政友會の內訌は主として鈴木自身が蒔いた種のやうなもの。

彼の懐刀に安藤正純がある。江戸前は魚河岸。今は魚河岸騒動で仲々の始末であるが、そこの親分佃政の支持を得て江戸で名を擧げた。安藤は切れる奴と折紙がついたが今は幹事長だ。その一翼には鳩山一郎がゐる。つまり安藤、鳩山の兩翼に乘つて鈴木總裁丸は飛んでゐる。その傘下を一わたり見廻はすとこれは〳〵大變な逸材が雲霞の如く螺集してゐる。

即ち鳩山中親分の身うちには犬養健、牧野賤男、太田正孝、土倉宗明、田村實、芦田均、林讓治、松岡俊三、工藤十三男、篠原義政、小高長太郎と云つた面々。

それに次いではづつと代議士田舍廻りのそしりはあるとしても宮崎一、高橋葉雄、武田德三郎松川昌藏、加藤賢治、箸本太吉、宮澤清作、益谷秀治、上田孝吉、末次虎次郎、小谷節夫、藤勝衛、岩瀬亮、宮古啓三郎、高橋熊次郎、八角三郎、玉置吉之亟、久山知之、助川啓四郎、松本弘瀬川嘉助、中井一夫、田尻生五、花城永渡、石井德久治、西岡竹次郎と云つた面々があるかと思へば、更に登坂良作、三善信房、木村正義、山下谷次、岩本武助、服部岩吉、森宰太郎、田中好木村作次郎、服部米十郎、山田佐一、山口忠五郎、田中彌助、島田七郎右衛門、鈴木辰三郎、八田宗吉、菅野善左衛門、小山田義考、胎中楠右衛門――いやこう書いて行くと義士四十七士の名

を連ねてゐるやうでその煩に堪えないからこの程度として切上げるが、鈴木親分トラストはこのやうなもので、ここに川村竹治、宮田光雄、芳澤鎌吉、山岡萬之助、木下謙次郎と云つた元老株がゐて鈴木の腕によりをかけてゐる。

次いでは所謂舊政友系の面々だ。山本條太郎歿し、岡崎邦輔なく、僅かに前田を鐵相に送つてその勢力の程を示してゐるが、このトラストには本當の親分がゐない。純粹の親分は三土忠造、小川平吉、山本悌次郎であらうが、三土、小川は世間周知のお札を戴いてゐるので當分は表面的な活動は出來ない、立川太郎、田中深、河野一郎、横川重次、石坂養平、出井兵吉、吉植庄亮、今井健彦、山崎猛、佐藤洋之助、畑桃作、坪山德彌、松村光三、岡田伊太郎、東條貞、菅原傳、春日俊文、石坂豐一、神保重吉、深澤豐太郎、牧野良三、大本貞太郎、山村豐次郎、藤山貞吉等の子分が居り、松野鶴平などともよく未だ大親分を笠にして相當腕節の強いのもゐれば、口先の鋭いのもゐる。しかも次に登場する久原房之助親分がスツカリ音をあげてしまつた後をうけて一躍息をふき返した面持があり、一統は前田鐵相を擔いで時こそ來れと待ち構へてゐる。鈴木總裁の後任が前田だなんと云ふ風評が頻りに飛ぶのもこの邊の子分の放送と見てよい。

さて問題の久原房之助だ。

近世政友會切つての所謂親分ぶりを示したのは何と云つても久原だ。久原はその背後に久原財閥と云つてよい財的バックがあり、その上鈴木に總裁の椅子を横取りされてからは、遮二無二政友切つての親分たらんとして暗躍につぐ暗躍地下運動をやつた。まづその子分を一わたりして見ると——

三井德寶、津雲國利、志賀和多利、菊池右衛門、佐保昇雄、高原宗七、西村丹生、生田和平、中野治介、國光五郎、古河和一郎、青木雷三郎、岩崎幸次郎、森田正義、倉元要一、大石倫治、佐々木靜治、藤井達二、小笠原八十美、西方利馬、南條德勇と云つた一騎當千の勇士揃ひである。この他久原は彼一人の腕と肚に頼つて右翼浪人あり、新聞エロあり、財界ボスあり、ありとあらゆる階級に相當根強い勢力を張つてその手足とした。從つて彼の親分ぶりは意想外のところにまで飛火して、彼の一投足は財界はもとより、政界、軍部すらも注目を怠らなかつたと言ふ程に恐ろしいものがあつた。

がぞれだけに失敗も多い。彼が功をあせればあせる程賽の目はうまくころばず、廣田內閣成立

の時なども、辛くも自家勢力の及ぶ範圍で島田俊雄を農相に送つただけ。その相敵中島知久平を追放することにだけは成功したが、その後の賽の目は極く惡い。しかも致命的の惡さだ。總選擧でさへも、その傘下の代議士は多く落選し、出たと思つても違反續出して、この夏を刑務所あたりへ避暑した連中も少なくない。

思へば大親分たらんとして中絶した久原房之助も、時の運命とは云へ、功をあせつたばかりに惜しくも長蛇を逸したと言へる。

惜しく挫折した親分としては床次竹次郎がゐる。政界渡り鳥とか何とか、あまり香ばしくない異名を頂戴してゐるが、仲々官僚畑から浮上つてあれだけの政黨親分となつたからには並大抵の努力でないし、又凡骨の瘠武士ではない。

晩年の腐り初めは張學良から五十萬元貰つたとか貰はぬとかで大悶着を起し、同じ政友畑の津雲一派から議會暴露の爆彈を投られて少しは閉口した。根が金融問題だし、證明しやうにも相手が惡い。鶴岡和文、赤塚之助等と云ふ時の氏神まで出現したが、黑白はつかない。結局あらぬ？風評を立てられたゞけが惡運のめぐり合せと云ふか——以來病を得てポックリと逝つたことは淋

しい。

その傘下には金光庸夫、川島正次郎、本多貞次郎、尾崎天風、山田又司、山本芳次、倉成庄八郎、小野康、綾部健太郎、清瀬規矩雄、伊藤岩男、田尻藤四郎、井上知治、盛島明長、中村嘉壽東郷實、寺田正市、岩元榮次郎、永田良吉、林拓務參與官があり昭和會に連つた飯村五郎、石井三郎、窪井義道、兼田秀雄、三鬼鑑太郎、守谷榮夫、青木精一、熊谷五右衛門、岸田正起、永山忠則、豐田收、森肇、藏園三四郎、陣軍吉、春谷正章、井坂豐光、山口久吉。綾川武治、今給黎誠吉、金井正夫、兒玉右二などと云ふ强者どもが目白押してゐた。その上に天野屋利兵衛ならぬ男の中の男望月圭介があり、次いで內田信也、山崎達之輔などと云ふ英雄がゐた。またその上には水野錬太郎と云ふ古强ものがゐて床次のために背後の糸を引き更に飛石として秋田清、その子分長島隆二、津崎尙武、小泉策太郎（これは親分）などと云ふ影武者があり、瀧正雄などと云ふ黒幕もゐた。この子分同僚の協力はうまく行けば床次王國を形成したかも知れないが、その土壇だつた憲政々治がぐらつき出し、政黨の罪惡時代が世の明るみにさらされてしまつたから、遂に床次の政治的策謀は畫餅に歸してしまつた。

かように床次王國の成らなかつた根を洗つて見ると、床次親分がたゞに政界渡り鳥として貫錄が足りなかつた人望がなかつたせいばかりではなく、時代の流れが。つまり床次型の親分を必要としなかつた。換言すれば政黨と云ふ自由主義的機構を通じての發言以上に、もつと大局的な國家的な見地から物を見、物を言ふところの人間を必要としてゐたのであつて、敢て床次の親分ぶりだけを攻めては當らない。

六、小親分を覗く

選擧の神樣としては三ツ子も知つてゐた安達謙藏も親分の中である。但し根が官僚だけにそのスケールも如何にも官僚くさく、その上うまく行かぬ時には神頼みの一手あるばかり……か、七聖殿とかに籠つて世上の風雲をよそに閑居してゐるらしいが、仲々閑居の出來る爺さんではない。

その懐ろからは只一の弟子中野正剛に去られ、その唯一の頼み山道襄一にも去られて、又ぞろ國民同盟は崩れて行く。これも安達の親分ぶりを以つてしてはどうにもならぬ筋合のもので、もと〳〵急進中野と不平山道の兩翼が野心の安達の懐ろに飛込んで一旗盛り上げたまでのことで、

らまく行かねば末は野となれ山となれで、各々勝手の方に飛出して、中野は中野で一旗盛立てやうと懸命の努力をするし、山道は元の鞘におさまつて役付か何かでノホホンしてゐる。

従つて安達勢は實に十二名、清瀬一郎、野中徹也、風見章、佐藤啓、高岡大輔、大竹貫一、鈴木正吾、伊豆富人、藏原敏捷、石坂繁、三浦虎雄、伊禮肇を數へるだけ。

前回の總選擧では、中村纖男、鷲澤四十松の名士まで落選して一葉落つる秋の前觸れとなつたしかし安達は枯れてもその正根は殘る。つまり若槻輩ではどうにもならなかつたところに安達の反旗を翻した理由があるが、事實問題として、若槻ごときイデオロギーでは到底政黨の建直しはやつて行けない。今日民政黨内部に既に舊思想派と對立する新思想が發生して、黨再建運動を目論見てゐるあたり、けだし安達の正根をとゞめて、今に實證してゐると云へる。

既成政黨は親分を必要とし、この親分のもとに分子が蝟集して、大を爲して行くが、これが同じ政治分野でも右翼各團體となつて側面から政局の隙間に喰入らふと目指すものにとつては、敢て親分を必要としない。從つてこの親分は自然親分らしからぬスケールで質的に行く挺身隊である。

前議會で問題の口火を切つた國體明徴の運動の一歩、美濃部博士の「天皇機關說」に食つた菊池武夫等も軍人出の右翼の錚々たるもの。

これを逸早くとり上げて問題とし、國民運動にまで開展したのは同じ軍人の小林順一郎だ。三六社に立籠つて次代工作をやるといふ凄い鼻息、その財的バックに石原廣一郎がゐたとの說もあるが、石原は大川周明、轉じては明倫會方面の役割をつとめたことはあるが、小林の意氣は石原あるなしに拘らず、凄い。右翼陣營が點々として振はない中にあつて小林は國體明徴運動徹底た大童、その子分と云ふ程の子分を養つてゐるわけではないが、全國に散在してゐる在鄕軍人會を母胎にして呼かけてゐる。

根が軍人出身だけあつて實行力は相當のものだが思索を輕じてゐる。それに兵術家であるかも知れないが民衆を禦する戰術を知らないから、一般民衆は只おそろしさに尻込みしてゐる程度で小林の直後に從つては行かない。將來のことはいさ知らず、こまゝで行けば親分小林の運命も行詰る。今取るべき問題はころがつてゐる。再び起つて彼が國民運動を起し得る熱氣があれば、先もの親分として彼は相當の人物たり得るであらう。

この意味で政治線上に躍り上がつてはゐないが、既にその頭角をもたげ、今やその時機を待望してゐるかに見える政治家と云はんより國家改造派の政治家に、小林省三郎海軍中將がゐる。

彼は小林順一郎の如く華々しく表面に浮き出ることを好んではゐないが、鎌倉の家から芝の事務所まで出向いて、熱心に近世政治動向史を研究してゐるあたり、決して凡骨のよくするところではない。

彼は時めく海軍の强硬派艦隊派の雄として部内では評判の快男子だつた。眞崎等と一緒に首の座に上つてしまつたが、これも肅軍ばやりの時世なればこそ。

南方進出論をやれば無慮數時間に亘つてまくし立てる熱辯家であるが、目下時世の動向を凝視して、政局展望臺の上から望遠鏡で研究してゐる。

彼に金と時世を見る明が備はいさへすれば彼はきつと政界に一風雲を惹起す運動をやるだらう陸軍の宇垣程の政治家でなく、むしろ政治家としては第一年生であるが、それだけに習作の意味で、その出發は期待していゝ。

また彼が失敗してよく、また彼が、政治運動、國家改造運動に直接的に出發しないとしてもそ

れでいゝ。

彼は軍部出身の政治的改革論者として、實踐家としてその行動を一歩發したことによつて既に彼の意圖は十分であり、親分傳に取上らるべき貫錄を持合せてゐる。

何故なら由來軍人は一刀を腰にした現役時代にだけ物を言ふが、一たん浪人するや一介の浪人に成下つてしまつて、國家の大業は知つて知らざる如くよそおい、てんで地上の政治問題等は口にしたがらぬと云ふ個人主義者が多かつた。

その舊殼を破つて小林が持前の親分ぶりを發揮しやうとしてゐることは、けだし昭和の政局線に太く一點を劃すべき意義を持たぬだらうか。

南方進出が叫ばれ、海軍青年將校間の進取的論議が盛に行はれる今日、海軍中將小林の政治的進出はけだし注目してよい。

舊殼を破る人物——その親分を物色すると、同じ軍人に橋本欣五郎大佐がゐる。

彼は從來最强硬派として傳へられ、しば〳〵橋欣の名で强硬中心組となつてゐたが、惜しむらくは今回の異動で豫備役となつた。

彼は小林順一郎程の山氣をもつてゐないが、いゝ意味では小林以上の政治家で親分だ。現に彼を圍る子分達も相當の數に上り、これから橋本の動きに注目すべき働きを行つてゐるが、今この子分列傳を並べることだけは橋本大成のためにことに遠慮する。

しかし橋本は決して豫備大佐で終らない。親分橋本の血は、しば〳〵色々の意味で問題にされてゐるが、政治家としての橋本は未知數であるだけに將來大いに買つてやらねばならない。

ただここで問題なのは橋本がどの程度まで政治的認識——つまり國家改造への方法論的見方から政治改革運動の熱意をもつかと云ふことである。單に豫備役になつたことが切つかけになつたと言はれたのでは橋本のために惜しんでもあまりあるもので、彼が政治認識をより高度に持ち、その上眞に國家改造の前線に乘出さうとするならば、さして時の問題を慌てる必要はない。

彼の意圖が具體化してゐない間から、早くも樂屋裏は騷がしく、そして所謂橋本の政治運動なるものが傳へられてゐる。

げだし橋本の親分的風格がこれをさせてゐるのであるが、彼の政治的親分としての眞價は今後に待つより外はない。

小林（順）小林（省）橋本とあげた序に建川中將もその一人たるを失はない。彼自身は勿論問題外としてゐるが、四圍はこれを推してゐる。今次の豫備役は絶好のチャンスと。早くも橋本、小林（省）との出發に一脈の關連あるかの如く傳へてゐる向も相當多い。しかしこれは眉つばもの。たゞ建川は政治親分としての氣慨と度胸だけは持合せた人物。それだけに世間が買ふと云へば足りる。

既に鄕軍同志會に立こもつた秦前憲兵司令官、更に古くは大亞細亞協會を牛耳る松井石根大將など軍部出身の親分型政治家は決して少しとしない。

しかし何れもその線に沿つて政治的に偉大なモーションを起さうとする信念なく野心もないから、親分型は小さく、そして一般大衆を廣く抱擁する程度の擴がりを持つてゐない。

この外樞府議長しておさまつた平沼麒一郎男も國本社を母胎として政治運動を開展した時代は常にフアツショの神樣視されたが、議長の椅子に登つてからその門開け、それにかへて政治運動打切りの方針に決し、今は親分としては相當昔鳴らした親分國本社もその影はない。

かやうに所謂政界親分は質的な變遷過程を明瞭に展示してゐる。即ち初代親分は政黨發生から

その前期で、野人としての親分と、そこには仁義による連りをもつて大親分の貫錄は生まれた

次の時代には政黨全盛期で黨を主體に、次には官僚の進出と併行して官僚を抱括する親分たるを必要とした時代で、前期に比して野人的包色彩うすれ、官僚濃厚となつた。次いで現代は大親分時代から次第に小親分時代へと分散過程をたどりつゝ、次第に所謂親分氣質は退職しつゝある

政界の大親分よ！　この混沌、行手を知らぬ時代こそよき意味での大親分の登場が望ましいのである。

財界の親分小分

一、番町會と卿親分

財界の親分ともあれば極めて現金のもので人間の信用——金を單位とした信用が持てるやうなら子分として收容もして置くが、肚はあるが信用が出來ない。人物は出來てゐるが金のやり繰が

まづいなんと云ふ手合は、財界親分からは、あへなく見捨てられてしまう。

つまり金と金との關係で信用の出來る男ならば、それが當家の書生だらうが、居候だらうが問題ではない。よしそれが大會社の專務だつて、一度間違つて金でしくじつたが最後、彼は親分から一朝にして捨て去られることを覺悟しなくてはならない。

事程左樣に金と金——財閥を結ぶものは金であり、金が物を言つて親分から枝が生え、その枝から小枝が出る。

財閥の直系、傍系、子會社、姉妹會社などと云ふのは、勿論こうした金と金との信用連鎖であり、結成されるトラストはこれ等關係會社を綜合、より合理化して金の增殖を計畫する一機關であるに過ぎない。從つてこのトラストは儲かれば成功し、儲からなければ無きに劣つて困りもの折角結成したトラストが有害となつて彼等は沒落しなければならない。

同鄕、同學、そして同業と云つた關係から結ばれるトラスト、そこに金と金との信用から横に結ばれる網の目、財界の親分はこの經緯の上に君臨して思ふ存分に甘い汁を吸い、この親分と親分との結がりこそ近世資本主義と呼ばれるものゝ本體であり、この結がり、その利潤率こそ、よ

り高度化され行く資本主義の發達史なのである。

さてその代表的財閥の大親分は、先刻既にご存知の鄉誠之助が筆頭に來る。彼は例の番町會を率いて帝人乘取りに成功し、その上神戸製鋼乘取りにも成功し、其の怪腕はありとあらゆる分野に浸潤して一時は世のヒンシュクを一身に集めたもの。

しかもこの番町會の活躍が根本となつて、あたら齊藤實內閣も潰滅してしまつた。それ程彼等の凄腕は堂に入つてゐたし、日本財界裏街道士として重きをなしてゐた。ここに集まる面々は既に記すまでもなく政界の大立物で自他共に許した三土忠造、中島久萬吉等の大臣級人物があつたと言はれ、そこに於いては澁澤財閥の御曹子澁澤正雄、新聞界の大立物讀賣新聞社長正力松太郎株屋さんでは名負ふての永野護、長崎英造その他河合良成あり、電鐵界の後藤國彥あり、また松岡潤吉あり、中野金次郎あり、更に金子喜代太、あり、甲州財閥の雄根津嘉一郎も登場し、その上、金子直吉、太田信三あり、更にまた臺灣銀行の頭取だつた島田茂あり、官吏では大藏次官までやつて威勢を張つた黑田英雄あり、その他等々、記せば長きことながらで、おいそれと並べ立てられるものではない。

ではこの多勢の面々がどうして番町會、即ち鄉誠之助の旨によつたかと云ふに、そこは蜂の甘きに寄るが如きもの、番頭格には大分縣生れの暴れん坊京王電車の後藤國彥があつて日華生命の河合良成、山叶の永野護、富士製鋼の澁澤正雄、國際通運社長の中野金次郎なんと云ふ手合が番町の鄉邸に時折よつては色々と雜談をやつた。この財界人が雜談をやることは即ちエロ漢が寄れば猥談をやり、政治家がよれば政談をやるのと少しも變つたところはない。即ち彼等は金儲け話をやつた。どうして濡れ手に粟の金儲をやらうかと相談した。いや話は自づと金儲け話に這入つて行つた。そこへ臺灣銀行の金庫に畫寢してゐた帝人株の話が登場し、これを引出せば利鞘どれだけの計算は生まれて乘出したのが帝人問題の出發だ。鄉はおろか、番町の面々もまさか齊藤內閣を潰す程に發展するとは夢想はなかつたが、時の勢ひは恐ろしい。

時恰も政黨と財閥とは結んで國家を汚辱し國民を搾取するものだと云ふ先入視があつたからたまらない。この際財界ボスを一掃して政黨惡の禍根を斷てと云ふ要望はどこからともなく擧げられ檢察當局も決然起つて呼應し、時めく商工大臣中島久萬吉、鐵道大臣たりし三土忠造まで市ケ谷に送られ政友會首腦部に大衝擊を與へたばかりか、鳩山鈴木總裁をも加へて政友首腦部は悉く

醜い！ の定評を受けるに至つた。

郷親分を圍んで番町會は相當の仕事をやつた。よかれ惡しかれ仕事をやつた。しかしその縱横の鬼才に魔がさして子分共は郷親分の顏に泥を塗つてしまた。

二、三井を背負つた他田親分

親分郷は所謂近代型親分であつたが、財閥的親分として第一に擧げれば、何と云つても三井、三菱、三井は三井高公を筆頭に、南條金雄、島田勝之助、金子堅太郎、米山梅吉、牧田環、武村貞一郎、藤井市三郎、平田篤次郎、福島喜三次を初めとして、顧問に益田孝を持つてゐた。最近では所謂財閥のカムフラジー時代が來て、これ等元老の中から一線を退かせて人材本位で拔擢、資本集中主義の目先を代へる戰法を取つたが、その根本策に動搖も變更もある筈はないが、何と云つても三井が時代の潮流を巧みに泳ぎ切つて五・一五事件以來の相當に複雜した時流に抗しつゝ表面社會政策的方法を用ひて國民大衆を怨嗟の府をそらすために努力した、時の氏神は池田成彬である。

彼は郷に匹敵した親分氣質で、より時代を知り、人間を知り、更に明日の時代を知つた逸物であつたことは事實だ。

それだけ彼の傘下には大物螺集の形で、東邦電力の松永安左ヱ門、東電の小林一三、日本電力の池尾芳藏、大同電力の增田次郎、それに東京瓦斯で名を成した岡本櫻など、何れも池田の子分組だと云はれてゐる。その顏ぶれを見ても成程とうなづける大物並びで、番町會の下廻り役等とは少しばかり役者が違ふ。何れも資本を食ひ、その代りボロ儲もあると云ふ電力、瓦斯事業關係に子分が多く、わけても今次の遞信省案電力民有國營案では、相當の波瀾を豫想されるもので、池尾などはこのところ大童の奮鬪で、政府を相手に一戰を交へやうとする程の大物である。

池田もこうした子分を目をかけたゞけあつて相當の苦勞もした。その代り池田の名は三井以上に或る場合は不朽の名となり、この名こそ今日彼を閑居せしめてゐる所以である。時代の明日を知つて、早くも有能右翼に目をつけ、横濱に居住する某右翼陣の强者などは、池田の恩顧によるところ甚だ多く、選擧戰等を通じ、池田の投げ錢は相當量に上つてゐる筈だと傳へられる。

この邊眞疑不明であるが、池田は今日の三井以上に近代財閥としての三井を創り上げて勇退し

たかつたのではあるまいか——。

池田は閑居するには少しばかり出來過ぎた親分だと言ふ評判が高い。

三、小親分鼎立の河崎閥

三菱は財界の親ではあるが、親分と云ふ身上ではない。岩崎小彌太、串田萬藏、三好垂造、永原伸雄、赤星隆治、船田一雄、羽野友一、武藤松次、秋山昱禧、大越政虎、青木雷太郎、三宅川百太郎、三谷一二等々の面々が御用大事とばかり相つとめてゐる次第で、これぞと云ふ親分ゐない。串田にしろ三好にしろ、切れ者であることで人後に落ちはしないが、親分と云ふ親分肌ではあるまい。

そこへ行くと川崎財閥は桁は落ちるかも知れないが市井の親分、親分らしい親分はゐる。

郷を別格として、川崎八郎衛門、川崎肇、河合鐵二、河合良成、高梨博司、後藤國彦等々があつて、二つ並べただけでも迚も感じが強い。それだからと云ふわけでもあるまいが、御當家筋の方ではビツタリと一族の門戸を張つて財閥らしく世帶を張りめぐらしてゐる。

先づ當主は八右ヱ門川崎光德合資の代表社員はその長男守之助、日本火災副社長、川崎貯畜、福德生命の各取締役である。

その甥の肇は川崎信託社長、川崎第百取締、日華徵兵監査役、日本火災社長、帝國火災社長と云ふ要職がある。

その女婿河合鐵二は川崎第百常務、日本火災取締、野田商誘銀行取締である。

同じく女婿成田儀六は川崎貯蓄取締、川崎第百神田支店長をやり、甥の川崎甲子男は昭和銀行及び千葉合同銀行副頭取、國華徵兵保險、日華生命、福德生命の各社長、弟の伊藤秀之助は川崎貯蓄取締役、次男川崎大次郎は川崎貯蓄、日華生命取締、義甥の川崎芳男は川崎貯蓄監査役、川崎第百銀行支店長代理、姻戚の川崎知司は川崎第百銀行板橋支店長代理、川崎貯蓄取締をやると言つ風にそれ〳〵血と血のつながりを單位にして金融の道を死守して行く。その上高梨博司などと言ふ元老が長男守之助の補佐役となつて指揮官の役割を果してゐるのであるから先づは川崎は安全。

血より濃い子分はない筈だ。がそこへ輸血されたのが血液型の變つた河合良成であり、後藤國

彦である。

河合は弟の鐵二が女婿と云ふ關係で取引所理事から、また後藤は新聞記者上りから何れも財界世話業の郷に拾はれて一は日華生命に、一は京成電軌にもぐり込んだ。そこで河合の腕は八千代生命包括移轉に初まつて、帝人株の賣出問題にまで來て高梨の勘氣に觸れてしまつた、わけても番町會の暗躍が世の排擊の的となると同時に川崎家からも排擊の火の手は上つてとたんに河合は日華、福徳兩社の專務から轉がり落ちてしまつた。そこへ帝人事件は侍つてゐたとばかりに落かゝつて來て彼を縛り上げてしまつた。

一方後藤も京成、京王、王子電鐵の合同を計畫し、時の商相中島久萬吉を賴りに電力界の川崎トラストを結成しようとしたが肝腎の中島に鼻毛を拔かれ、五島慶太にはしてやられて、そこへ帝人問題と云ふわけ。血液型のちがつた河合、後藤の兩名かくして血氣にはやつて何れも失敗した形だが、これに引かへて、いとも地道な譜代の臣にトントン繁榮し、つい先頃は川崎貯蓄と東京貯藏を合併させて川金第百の大膨脹ぶりを見せた。

こゝでも矢張り、大親分の生まれる素地ではなく、小親分が、相互に金科玉條を心得てその賭

場を守つてゐさいすれは、身上安全と云ふ金融畑だから、ここもと大親分の影は薬にしたくもない。

四、新興親分型　藤原

金融親分登場の席に安田、住友等を拾つて見ると、これはまたコンクリートそのまゝの頑丈な基礎工作が施してあつて、安田は御大の安田善次郎、安田善四郎、安田善五郎、森廣藏、川崎清男、南莞爾と云つたがつちりした顔ぶれで押しも押されもせぬ。

これぞ安田の正都派的經濟說の生まれる所以で、政治的にも高橋前藏相の健全財政策が打つてつけだつたりする方向を辿ることになる。

住友には仲々味をやる親分が筋を引いてゐる。西園寺公の秘書原田熊雄はこの財閥に通じ、住友は西園寺に相當の敬意以上のものを拂つてゐる。その傘下には生友吉左ヱ門を初として小倉正恒、八代則彦、今村幸雄、國府精一、古田俊之助、山本信夫、繁本績等がゐて、これも石橋を叩いて渡る手合が多く、ころんでも握つた小石を放さない類である。

こゝらで既成の財閥親分に見切りをつけ、新興氣慨に燃えた謂はば新財閥にふれて見ると先づ藤原銀次郎が來る。

彼は人も知る王子製紙の元締、製紙業を獨占して破竹の勢である。彼の前進ぶりの物凄さには流石の官僚どももどう勘違ひしたものかひどくおとなしい。製紙業を國營とすべしと第一に日用文化必需品たる製紙業に目をつくべきであるに拘らず、一向にこれをやらない。東京の大新聞なども製紙同業關係から本音を擧げる事は出來ない。上げたら揖が行くし、行かぬまでも藤原が恐い。前議會問題の退職積立金制度問題では池田を對手にして大論判をやり味な所を見せたが、それ以來は關係全産聯の常務理事の椅子を捨て、中小商工業者の金融機關を整備するのだとして全産聯一線から引いた。彼の傘下には高島菊次郎、膳桂之助等の雄が居り、その他群ふの小親分は蝟集の有樣である。彼は人も知る産業組合合理化好きの好爺で、仲々に近代型だ。從つてインテリ財閥として將來大いに期待していゝ代物であるし、彼も亦その邊の所に見込を置いてゐるせいか、財政方面の新智識や新聞界の古手、財政通等を初め右翼の浪人どもを近よせて、頻りと次代工作に熱心ぶりを見せ、所謂日本精神を口にして、仲々時流を見拔く眼光の鋭さには若いもの顔負けである。

五、次の覇者、森、野口、鮎川

時代も變れば人も變る。財界の親分も不死身ではないから、ボツボツ新人が擡頭して來てゐるとりわけ國防費の膨脹必須、軍需インフレ必然と言ふ有卦時代に這入つてから、軍需關係財閥はここぞとばかり大馬力をかけて生産能力の擴大强化に大童の活動をつゞけてゐるから、この陣容から將來相當の大親分が浮んで來るのは必然である。

現在では森矗昶がゐる。

彼は世界大戦の好機會に便乘して登場した男であるが、今は錚々たる一方の親分である。政黨的には政友會であるが、彼の現在の心境に政友會なんておかしくてたまらぬであらう。

日本電氣工業を卒ひてゐるが、大戦直後は總房水産株式會社を起して鹽化加里、粗製沃度の原料品を初め、醫療藥品、硝石、炭利等の工業品をやり、一躍斯界に名をなした。が大戦終了と共に彼の得意の壇上工業藥品の販路を次第に細ぼつたので、遂に業界を轉身、彼は味の素の鈴木三

郎氏の門下に入つて東信電氣會社をつくり、鹽素酸カリの製造を初めた。この事業が彼の今日の大をなす礎石となつた日本電氣工業の母胎なのである。

彼は一時は政界にも足を踏込んで相當な地盤を築き上げたかに見えたが、由來親分氣質とは言へ、泥水稼業を嫌ふ彼のよくする所ではなく、今や財界軍需工業方面の親分として男を上げてゐる。

次いで新人を物色すると野口遵で、日本窒素肥料の親分で、あまり世間では知られてゐないがそれは彼のやり口が鮎川のやうに華手ではないからだ。

その昔帝大を卒業した直後は一電氣技師として身を起し、福島の郡山絹糸紡績會社に入つてニコニコやつてゐたのだと云ふからその持味は忘れ難いものだ。

彼はこんな經歷から獨逸に渡り、機械のブローカーから小金をため出してとう〳〵五萬兩とやら、鹿兒島曾木川の發電所の買收類をやりながら、明治三十七七年には會社を創設してこの國の石炭山を原料として電氣事業を起し、石炭窒素の肥料製造を發明し、先づ事業家へ第一歩を踏み込んだのである。

それ以後の彼は大戰の波に乘り上げて巨利を博し、次いで近年では更に軍需インフレの好調に乘つてメキ〳〵と賣り出し、窒素肥料の野口は日本產業界において今や一脅威であり、これからまだ〳〵一親分としての行路を新開拓するであらう。

鮎川義介は日本產業の元締、井上侯の親類筋であり長姉は三菱の大番頭だつた木村久壽彌太に令妹は久原房之助と、九州の炭坑王貝島市太市に嫁し、その令弟政輔は東京藤田組の養子。彼の夫人は京都高島屋の飯田藤二郎の長女といふ風にその勢力は仲々相當のもの。

であるに拘らず、獅々の子は谷底に落され彼は、大學を卒業をすると同時に芝浦製作所に職工となつて月給四十錢を貰つた。越えて米國で鑄物を研究、歸國して三十萬圓を投じて戸畑鑄物を創立、これが彼の事業界への出發點であつた。

彼の義兄久原戸之助は既に周知の通り政友會重鎭とし、期待されたが、既に沒落し彼は現に久原財閥の一切をも背負へ立つて、所謂日產コンツエルンに全生命を打込んでゐる。

久原が政治に失敗したと云ふ前轍を知つての故ではなく、彼はもと〳〵政治を好まない。純粹な工業家としての事業家肌だ。久原に見るやうな野人的な大親分ぶりは見せてゐないが、事業家

として當然親分型に類するもの。その傘下には藤田政輔、貝島太市、日比谷祐藏、竹内雅彦、下河健二等の面々があつて日產鮎川を補佐してゐるが、今一息の時機に臨んで、義兄久原が政界引退の餘儀なきに至つたことは惜しんでもあまりある。

最後に財界の大親分たらんとすればする程政治的發言權を多分に持合せる必要は生じる。これなくては獵師が彈丸を持たずして山に入る類で、單なる財界騷せとなり、財界の親分たることなどは夢にも思はれるものではない。

そこで財閥の各親分はそれぞれ然るべき分子を子分格として政治方面との紐を忘れてゐない。がこの紐があまり露骨に、例へば三井の政友、三菱の民政と云ふやふなレッテルをはられてのことは將來のためならずで、一流財界人はその邊適當に紐をかくしてゐる。

即ち安田が高橋によかつたり、西園寺に住友が食込んでゐたり、關西では宇垣ファンの財閥が待構へてゐたりと云ふ有樣である。久原と並んで中島知久平なども政黨として活躍し財界親分までにはなつてゐまいが、政治方面に相當の筋々をつかんでゐる。

商船代表には中橋五市がゐたし、古河財閥には中島久萬吉がゐた。片倉財閥には今井伍介が居

り藤山には藤山雷太あり、服部には金之助あり、大川には大川平三郎自身があつて、大橋は新太郎自ら、野村財閥には野村德七あり、殘野財閥には若尾璋八あり。更に根津には嘉一郎が控えて居り、山口財閥には町田忠治があり、原財閥には中村房次郎ありと云ふ風に、財界の旗頭はそれぞれ適當に政治的分野との連絡連携を怠つてはゐない。

色々の意味から財界の親分を一瞥して意は盡たぬものは多いが、根津親分の傘下に東電の河西豐太郎、日清紡の宮島清次郎、富國徵兵の吉田義輝等が居ることを最後に補足して、財界の親分子分は『金と金』に連なる信用が第一主義で、その意味から、血と血の連がりに基礎を置いて、最も安全にその財を保存しやふと吸々たるものがあることを記して置きたい。

親分は子分のためでなく、親分それ自身のために、子分は親分子分の關係を契機として金の蔓に寄生せんがために子分たるの分に安じつゝチャンスを狙つてゐる。

恐ろしきは金の世の中なるかなと云ひたい。

愛讀者諸氏へ！

忙しい現代人には智識吸收のスピード化が必要であります。轉變止むことなき世界の情勢、日本の動き――これら問題を常に簡潔に而かも正しくスピードに編んで讀者へ送り度いと我社の努力は經えず傾倒されて來ました。既刊各種は各位の讃辭の嵐、まさに適時安打でありました。何卒既刊書も御併讀の程願ひます。

時局は廻轉する。我社は内容の清新、眞相の闡明、俊敏なる收輯に向つて一意今後の努力を期して居ります。

×

御註文は本社振替口座東京八九三八二番を御利用下さるか、切手代用又結構でございます。十部以上纏めての御註文は相當割引致します。

「定期會員」制を組織して特別の廉價に賣切れの怖れなく入手出來る方法もあります。

政界財界親分子分

定價 金十錢（送料二錢）

昭和十一年九月十一日印刷納本
昭和十一年九月十四日發行

著者 阿部治郎
發行兼印刷人 古西清光（不許複製）
東京市京橋區槇町一ノ五（城邊ビル）

印刷所 隆文舍印刷所
東京市本郷區元町二ノ九

發行所 有恒社
東京市京橋區槇町一ノ五（城邊ビル）
電話京橋(56)四〇六六番
振替東京八九三八二番

◇廣告料金＝廣告掲載御希望の向は御照會下さい
◇特約大取次店＝東京森田書房・東京啓德社・東京鐵道保養會・大阪新正堂書店・弘濟會

◁好評既刊パンフレット▷

木村淳一郎著 忽ち二十版
實踐浮世哲學 定價十錢 送料二錢

木村明達著 好評五版
頭腦の若返り法 絶版 定價十錢 送料二錢

和田貞造著 三萬部發行
若眼の人生 定價十錢 送料二錢

和田耕之介著 六萬部發行
次期内閣は誰の手中に 定價十錢 送料二錢

近藤啓助著 拾萬部發行
露滿國境切迫す 定價十錢 送料二錢

近藤啓介著 日下發賣中
爆彈男ヒツトラーの全貌 定價十錢 送料二錢

早見賢治著 日下發賣中
大事件後の日本 定價十錢 送料二錢

國防經濟研究會編
軍需工業に躍る人々 定價十錢 送料二錢

國防經濟研究會編
日濠を操る魔手 定價十錢 送料二錢

堀竹之介著
宇垣の動向 定價十錢 送料二錢

東京市京橋區南町一丁目五番地（城邊ビル）
振替東京八九三八二番

有恒社